

# 造形表現の指導に関する模索

— 制作の動機と経緯を通して —

黒 木 重 雄

A Search for Instruction on Art Expression

— Through a Motive and Process of my Own Works —

Shigeo Kuroki

造形表現の指南書をパラパラとめくることがある。どれもこれもたいていは技法中心に書かれている。そこをみんなが知りたがっているためなのか、あるいはそこが書き易いためなのか、随分と偏っていると思う。例えば、絵画ならば“なぜ描くのか”“何を描くのか”“どう描くのか”という3つの問いに向き合わなければ作品たり得ない。専門家だろうと子どもだろうと同じ。「描きたくもない芋掘りの絵をクレヨンで描かされた」ではダメで「芋掘りの絵を描きたかったのでクレヨンで描いてみた」でなければ意味が無い。技法が占めるウエイトの軽さが解るだろうか。重要なのは“なぜ”と“何を”の方だ。しかし、この“なぜ”と“何を”を指南するのは難しい。個人の問題として咬んでいるものであれば目にするにはあるが、他人を指導する言葉に落とし込んでいるものは見たことが無い。私もできない。なので、とりあえず個人の問題として作品制作のウラ話を咬いておくことにする。いつか指南書を書くことにでもなった時には、こんな資料がきつと役に立つはず。本稿では3作品について、その制作の動機や経緯を書く。

## 1 One day

2014年、アクリル画、227.5×546.0cm

本作品を第20回岡本太郎現代芸術賞展に出品した。作品制作のモチベーションについて考える良い機会になったので、その顛末を書き留めておく。

20代の頃は、国内外の色々なコンクールに挑戦していた。評価までに時間がかかりがちな美術の世界において、コンクールの評価はものすごく速い。応募して数週間、遅

くても1、2か月後には結果がでる。そのスピード感とワクワク感がとにかく楽しかった。30代になると、その熱が少し冷めた。理由は魅力的なコンクールがひとつまたひとつと終了していったから。そして、今から12年前の第15回青木繁記念大賞展を最後にコンクールからは遠ざかった。当時43歳。コンクールで発表すること自体が時代遅れだと思えるようになっていた。さらには、同世代がコンクールを卒業してステップアップしていく姿に引け目も感じていた。50代になった。いい作品を作っていればいつかは報われるはずと定期的に東京で個展を続けてきた。が、毎回反応なし。そして52歳の時の個展、これまでの自分の作品の中で最も良いであろうと思う作品『One day』を発表した。いつもより好感触だった。が、それっきりだった。1年3か月かけて描いた作品がわずか6日間の展示で終了。200人にしか見てもらえなかった。一番良いものでも通用しないのか……。心が折れた。しかし、今回だけはそのままこの絵を倉庫の中に終い込む気にはなれなかった。どうにかしてもう一度世に問うてみたい。何か良い方法はないかと思案したところ、コンクールを思いついた。こうなったらなんでもいい。10年ぶりにコンクールの情報を検索してみた。すると、挙がってくるのは名称も主催者もすっかり様変わりしたものばかり。ひとつひとつ目を通して、応募できそうなものをリストアップしようと試みたが、53歳という年齢と5.5mという作品サイズでは、ことごとく門前払い。唯一門戸が開かれていたのは、三菱アルティアムの『ローカルプロスペクト』なる変わり種。このコンペ、4名で行うグループ展の3名は既に決まっており、残る1枠を選ぶというもの。年齢に制限は無い。しかも、大きさはアルティウムに展示できればOK。応募してみることにした。選考方法は書類選考。作品そのものというよりは頭の中を重視している趣だったが、ガンバって企画書を作成し郵送した。1か月後、企画書が返送されてきた。選外の通知も同封されていた。残念な気持ちになった。誰かに負けたことが残念だったのではなく、世に問うチャンスが断たれたことが残念だった。しかたがないか……。でやり過ごすことにした。

いや、やっぱり、やり過ぎせなかった。なので、もう一つ応募してみることにした。それは岡本太郎現代芸術賞展。これはメジャーなコンクール。実は、応募するかどうかでかなり迷った。というのも、そもそもこのコンクールには応募資格が無かったからだ。なぜなら、作品サイズが50cmもオーバー。普通に考えれば規定外の作品は選考以前に失格。しかも非常識。ひとしきり躊躇したのだが、失うものは何もないので“どうにでもなれ”と応募書類を投函した。1か月後、薄っぺらな封筒が届いた。開封してみるとぺらぺらの紙に書かれていたのは入選の文字。どうやら作品サイズには寛大だったよう

だ。この入選は嬉しかった。自作『One day』をもう一度世に問える。選考の概要も判った。入選者数26名。氏名も公表された。ネットでそれぞれ検索してみた。強者ぞろいだった。

2017年2月、川崎市岡本太郎美術館に自作を展示しに行った。当方の展示は平面作品を壁に取り付けるだけの簡単な作業。約4時間で終了。他の出品者の立体作品やインスタレーションの展示は2日がかりの大仕事。さながら工事現場のよう。5m級の立体作品が続々と組みあがっていく。そんな作品群に囲まれながら美術館の巨大な壁に収まった自作を見ての感想は“小さい”と“おとなしい”。もっと大きいと思っていたし、もっと激しいと思っていた。憂鬱な気分になったが、いまさらどうしようもない。

展示してから2週間後、今度は受賞者発表とレセプション出席のため再び川崎市岡本太郎美術館に行った。2次選考は、展示された状態で行われる。岡本太郎賞をはじめとする各賞がそこで決まる。改めて展覧会場をぐると見て回った。平面も立体もインスタレーションも映像もなんでも有り。まさに異種格闘技戦。この中から受賞作品を決めるのは、ロックもジャズもクラシックもありの音楽祭でどれがいいかを決めるようなもの。さすがに乱暴だと思っ一方で、刺激的でもあった。

授賞式。受賞者が発表された。特別賞という賞をもらった。ホッとした。自惚れに聞こえるかもしれないが、とにかくホッとした。なぜなら、今回ばかりは埋もれなくなかったのだ。というのも「並べさせてくれさえすれば勝負できる」と常日頃から自分に言い聞かせながら、いや自分を騙しながら絵を描いているので、並べてしまった以上、言い訳できなくなってしまったからだ。これでもし埋もれてしまったら、モチベーションが砕ける。明日からの制作のためにも、どうしても埋もれなくなかった。それと、昔ならば今回ダメでも次があると思っていたが、それなりの歳になってしまっているし、今回の作品は限界までやった感が強かったので、もうこれ以上の伸びしろは正直望めそうにない。したがって、これで埋もれてしまうのであれば“オマエは通用しない”ということを宣告されるようなものだと思いに思い詰めていたのだ。たかだか毎年行われているコンクール的一幕に過ぎないのに、いつの間にか大きな覚悟を突き付けられるものになっていた。ところで、選評で山下裕二さんに「おそらく長い時間をかけた、作者入魂の一作だと思う」と評してもらった。こんな励ましの一言が大きな勇気になる。これでまた先につながった。

『One day』の制作の経緯は、2015年の個展のパンフレットで詳報した。その全文を以下に掲載する。

2012年12月20日、午前4時30分、目が覚めた。そのまま眠れそうになかったので、枕元に置いているスケッチブックを開いて、次の絵の構想を練ることにした。ここ数点シンメトリーの作品が続いたので、とりあえず左右が大きく違う絵がいい。するとするとペンを動かした。するとすぐに、画面右半分は人々が災禍で苦しんでいる様子、左半分は天使たちが森で居眠りをしている様子というアイデアが浮かんだ。人間がどんなに苦しくもうと神様は助けない、という絵。こんなにざらりとアイデアが浮かぶことは珍しい。

翌12月21日、午後4時30分、授業を終えて研究室に戻った。携帯に着信が2件あった。いずれも友人の山口三平さんから。折り返し電話してほしいとのこと。電話した。三平さんはいつものトーンで言った。「昨日、敦子が永眠しました」。はっきりと聞き取れた。にも関わらず聞き返してしまった。唐突な訃報だった。山口敦子さんとは、1993年来の親友。きっかけはニューヨーク、滞在中に意気投合、たくさん話をした。帰国してからも親交は続いた。関東と九州で離れてはいたが、親友だった。が、知らなかった。1年前から大病を患っていたらしい。咳がひどいので診てもらったところ癌が見つかった、転移もあった、あらゆる手を尽くしたが治癒には至らず、12月20日午前6時に息を引き取った、とのこと。

12月23日、山口家へ行った。呼び鈴を押すと同時に、涙が溢れた。柔らかな空調とやさしい陽光が注ぐ部屋に、敦子さんはいた。手紙や写真や花に囲まれた彼女は死んでいた。話しかけた。涙が溢れた。1時間ほど話をした。帰り際、別れの別れに、また涙が溢れた。

12月24日、遺影を写真立てに入れて、スタジオの机の上に置いた。彼女は、愛犬もに寄り添い、笑みを浮かべている。ふと、12月20日の早朝の覚醒が気になった。12月20日の朝4時半といえば、臨終間際の頃。人間がどんなに苦しんでいても神様は助けない。どんなに助けを乞うても神様は手を貸さない。まさしく、そのままのシナリオが川崎で進行していた。そして、そこから1000キロ離れた福岡では、指先からこぼれるままに、そんな情景を描きとめていた。

2013年7月、描きかけの絵が全て片付いたので、本作の制作に入った。キャンバスを張って壁に立て掛けた。右半分に水平線を引いた。ここに人々が苦しむ様子として、大津波を描く。そして、左半分は黒く塗り潰した。こちらは天使が居眠る大樹の懐にする。4か月間、描き進めた。描き進めるにつれ、画面が窮屈に思えてきた。もっと広がりが必要。はたして左半分の天使が居眠りをしている図なんて要るのだろうか？こんなものは描かない方が、生死のドラマを、よりリアルに表せるのではないだろうか？要る、

要らない、要る、要らない、と散々悩んだ末、要らない、にした。大きく計画変更。海を画面全体に延ばすことにした。最初からやっていたればなんでもないことが、途中からやることにしたばかりに、倍以上の無駄な手間がかかってしまった。しかも、左半分が大樹であることを想定して引いた水平線だったので、それが画面全体を貫くとなると、高さが低すぎるという難問も背負い込んでしまった。破綻した画面を前に、何度も投げ出しそうになったが、ぎりぎりまで投げ出さなかった。描き出しから約1年後の2014年6月、ずいぶん遠回りしたが、なんとか舞台ができた。難問は横たわったままだったが、画面には、瓦礫で埋まる海が広がった。

そして、仕上げには、瓦屋根を描くつもりだった。流された家屋の黒々とした瓦屋根の累々を、漂流する墓標に見立てて描きたいと思っていた。が、時間が経ち過ぎたせいか、瓦屋根の気分ではなくなってしまった。しかも、天使が画面からなくなった今となっては、瓦屋根では絵が無機質になり過ぎるように思えた。瓦屋根を生き物には置き換えられないだろうか？無理筋をなんとか捻じ込んで、たどり着いた先はカラス。または計画変更、カラスを描くことにした。まずは、カラスに見立てた黒画用紙を小さくまざままに切ってテープで貼って当たりをつける。貼ったり、剥がしたり、ずらしたりを繰り返す。しかし、カラスをバラバラに配しただけでは画面が持たない。水平線が低すぎるせいで、絵の重心が下がってしまいバランスが取れないのだ。何か工夫が必要。あれこれやっているうちに、カラスが次第に端に寄っていき、ぽっかりと空白が生まれた。さらに、あれこれやっていたら、画面ほぼ中央に大きな円形が現れた。この巨大な円形を利用すれば、絵の重心をごまかすことができるかもしれない。早速、カラスを円環状に集約してみた。うまくいった。横たわっていた難問がようやく解決した。そして、期せずしてふたつの収穫もあった。ひとつは、バランスが危ういが故の緊張感。もうひとつは、人知を超えたドラマの醸成。

4か月かけてカラスを描き切り、2014年10月に完成。完成した作品は、スタート時のイメージとは大きく違ってしまった。途中で何度も計画を変更したせいだ。もっと詰めてからキャンバスに向かうべきでは、と聞こえてきそうだ。その通りだ。しかし、試し描きを繰り返していたら、この絵は無かつただろう。なぜなら、詰め切っていたら、水平線が低すぎるなんてことにはならず、水平線が低すぎなければ、円環の解決策なんて必要なかったはずだからだ。というわけで、すべてが結果オーライだったわけだが、だからこそ、いつもとは違うところに来たように思う。道程はどうであれ、いつもとは違うところに来たことの喜びは大きい。疲弊した心身を癒して余りある。ついでに

「同じような絵は描かないようにしようと思っている」と事あるごとに言っている面目も立った。改めて完成した作品を前にして言う。これはこれで、生命の循環みたいなものが感じられて、気に入っている。

今回は、いつもより苦しい制作だった。日記を見返してみると「どうすればいいのかわからない」の一文が毎日のように続いている。切れそうになる気持ちを辛うじて繋ぎ止めながら、それでも、なんとか完成まで漕ぎ着けられたのは、着想の日のエピソードと無縁ではない。この絵は山口敦子が描かせてくれたと思っている。

## 2 集合住宅 A

2015年、アクリル画、97.0×324.0cm

本作の舞台は集合住宅。それぞれのベランダに布団が干してあるという絵。そもそもこの絵の元のアイデアは20年ほど前に遡る。当時のスケッチブックには、なんとなく不気味な絵を描こうとした跡が残っている。そんな中に、どの団地のベランダにも大きな黒い布が干してあるという架空の風景を描いたものがある。いずれは大きなキャンパスに描こうと思っていたが、きっかけがなくて先延ばしにしていた。

さてと、前作『One day』を描き上げた。制作は超が付くほど難航し、ほとんど疲れ果てた。そのせいか今回は、休息の意味も込めて、あまり苦勞しないで済む絵を描きたいと思った。前号でも、難産の次の制作では、ちょっと一休みの絵を描いたことを暴露した。その時は、視界不良個所の少ない絵を描くことで苦勞を回避した。今回は、それとは別の方法で苦勞を回避してみたい。それは、リスクの分散。前作『One day』は2.3m×5.5mの大画面全体にひとつの風景が広がっていた。これだと描くにせよ消すにせよ、常に大画面を意識しなければならない。仮にどこかで失敗したらその影響が全体に及びかねない。この緊張感はなかなかのもの。神経がすり減った。これを避けるためには、画面を分割すれば良いはず。大きな画面をいくつかに分けておけば、どこかで失敗してもその影響は限定的になる。これならあまり緊張せずに描ける。とは言っても、小さな画面の寄せ集めはしたくない。それだと楽しい感が見え見えで興ざめ。今回やってみたいのは、画面が構成要素によって分かれた絵。例えば、画面が複数の区画に分かれており、その区画をひとつずつ仕上げていけばいずれ完成に至るという類のもの。思い浮かんだのは集合住宅。1世帯1世帯を区画として捉えて、画面を分割する。あとは、1世帯ずつ描いていく。上手いかわからなかったらそこだけやり直す。これならストレスフリーだ。というわけで、集合住宅を描くことにした。前述の20年前のアイデアにつな

がった。

まずは団地の取材。長い間頭の片隅で気にしていただけのことはあり、すぐにピンときた。室見川沿いに自転車を走らせ、向こう岸に見えるレトロな団地を撮影した。早速、横長のキャンバスに団地を描いた。画面の分割は縦4段、横5列の20世帯にした。1か月ほどかかっただろうか、無難に団地を描き終えた。グリッド完成。あとは楽しい入居作業。さて、ここで立ち止まってふと考えた。20年前のイメージ通り黒い布ばかりでいいのか？あるいは、何か新しい可能性を探るのか？とりあえず紙を貼って考えてみようと思った。使いかけの色画用紙や折り紙が山ほど入ったりサイクルBoxを、隣の美術室から運び込んだ。まずは、黒画用紙を全てのペランダに貼ってみた。なんとも不気味でゾクッとする。いい絵になりそう。これでOKと思ったのだが、万が一のことを考えて試しに色画用紙バージョンもやってみた。赤、オレンジ、黄、黄緑、緑、青、紫、色とりどりに貼ってみた。すると、なんと、これまで自分の中でこれっぽっちもイメージしたことのない絵が眼前に現れた。こっちの方が面白いかも……。なにしろ新鮮。計画変更。ちょっと悩んだが、こっちをやることにした。それからの制作は実に楽しかった。四六時中入居者のことを考えた。いいアイデアが浮かぶと居ても立ってもいられなくなり夜中の3時に仕事場に自転車を走らせたりもした。まずはモスリムを住ませてみるか。次は新婚夫婦。同性愛者もいいな。小さい子供がいるのはどうだろう、といった具合。あっという間に満室になった。世の中には色んな人がいる。信じるころも違えば好きなことも違う。仲良くする必要もなければ、嫌う必要もない。日頃の私の心情を反映した集合住宅になった。ところで、特に気に入っている世帯が2つある。ひとつ目は、右端の3段目。住人は美術愛好家。布団はモンドリアンでカーペットはステラ。どちらも実際にありそうなのがいい。ふたつ目は、左端の4段目。水玉模様好きの家族。若奥さんが今まさにバスタオルを干すところ。

### 3 薫風

2015年、アクリル画、182.0×227.5cm

息子が生まれて、動物園に行く機会が増えた。それほど楽しくはないが、つまらなくもない。まあ、こんな機会でもなければ二度と来ることはなかっただろうと思い、いろんな動物を丁寧に見るようにしている。

絵画には動物がよく登場する。犬、猫、馬、鳥など人間との接点が多い動物は描かれやすい。では、動物園の人気者はどうだろう。象や猿やトラは定番。あまり見かけない

のはライオン、キリンあたりか。やっぱりライオンやキリンはアフリカ産なので、親近感がわかないのだろうか。そう言えばパンダも見かけない。象やトラと同じアジアの仲間なのになぜ。紹介されて日が浅いのが理由だろうか。いや、それだけではない。きっと、あの風貌が甘ったるいからファインアートでは扱い辛いに違いない。現に、デザインやイラストの世界では、そのかわいらしさゆえに引っ張りだこだ。もしも本当にファインアート界で敬遠されているのだとしたら是非ともそこは挑戦してみたい。気になる気持ちが増幅されて一気にパンダモードに突入。とは言うものの本物のパンダは生まれてこのかた見たことが無い。とりあえず本物を見てみないことには始まらない。というわけで、上京ついでに、花見でごった返す上野公園の、さらに人口密度の集中した上野動物園に立ち寄った。動物園に一人で入るのは生まれて初めて。行列に並んで待つこと30分、ようやく一番人気のパンダ舎の中へ。ガラス越しに初の実物パンダを見た。1頭は台の上で寝そべったまま動かない。もう一頭は同じところを同じ向きで徘徊している。甘過ぎもしもなければ、かわいらし過ぎもしない。ありのままの姿とはこういうものだ。妙に納得できた。せっかくなので、資料写真を撮って帰ろうと思ったが、ガラス越しでは不鮮明、しかも遠すぎ。まあ仮にそうでなかったとしても、絵になりそうなポーズなんかやってくれるはずもない。これについては、福岡に戻って図鑑やネットで調べよう。

続いて、パンダといえばやっぱり竹林。竹林は日本画では定番だが、油彩画ではあまり見かけない。私も描いたことがないので、これもまずは実物を見てみることから始めることにした。本来なら、四川省の竹林なんかを散策したいところ。でもそれは無理。そこで、いつものネット散策。遥か中国の内陸部から福岡の近場までをうろちょろしていたら北九州の合馬竹林公園なるところに辿り着いた。ここだったら実際に行ける。ドライブを兼ねて出かけてみることにした。出発して1時間ちょっとで到着。さびれた公園。人気がない。おまけに入口には毒蛇注意なる立札が立っている。少々緊張しながら竹林に分け入ってみた。残念ながらパンダが出てきそうな深い竹林には程遠いが、なるほど、竹が作るさっぱりした空間は感じる事ができた。たくさん写真を撮った。これだけ資料があれば竹林も描ける。

パンダと竹林の取材を通して、絵のイメージがずいぶんと固まった。が、何度スケッチしても何か物足りない。いくらなんでもパンダと竹林だけでは当たり前すぎて面白くもなんともない。こんなものは中国の土産物屋にずらりと並んでいるに違いない。何かユーモアに富んだひとひねりが欲しいところ。いつものように散々もがいていたら、パ



ンダに子供が跨っている様がひらめいた。これは面白い。パンダは見かけによらず獐猛らしいし、なにより超貴重動物、子どもが跨るなんてできっこない。金太郎のファンタジーバージョンだ。しかも、モデルには心当たりがあった。平民代表の2歳の息子。背格好もピッタリ。早速、近所の公園の遊具に跨らせて、写真を撮りまくった。まあまあいいのが撮れた。これをパンダと合成して描けばいい。

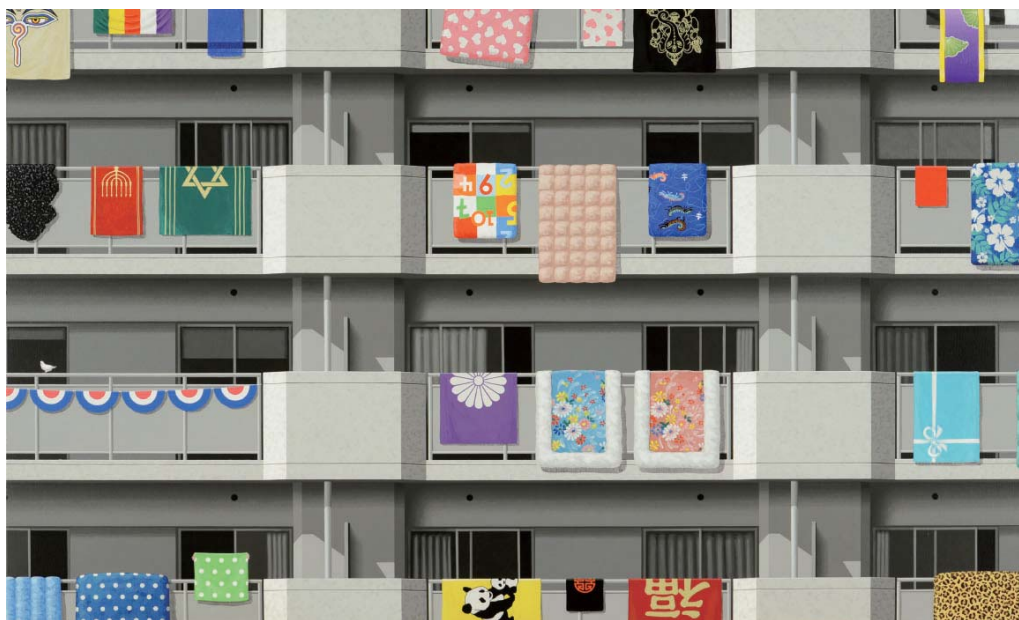
絵筆を持つこと3カ月、初めて描くものばかりだったので、それなりに苦労した。しかも、それぞれを描くことで精一杯だったので、全体の調和にまでは力が及ばなかった。というか、最初からちぐはぐになるだろうと薄々は予測していた。まあ運よく調和がとれるようなことでもあれば儲けものだと思っていたが、そうはならなかった。もしくは、ちぐはぐしていてもそれが魅力になればそれでも良いと思っていたが、そうもならなかった。よって、それぞれの描き方のちぐはぐ感はそのまま残ってしまった。解り易く言うと、失敗。制作は常に実験、思い通りに行くことの方が稀。

西南学院大学人間科学部児童教育学科

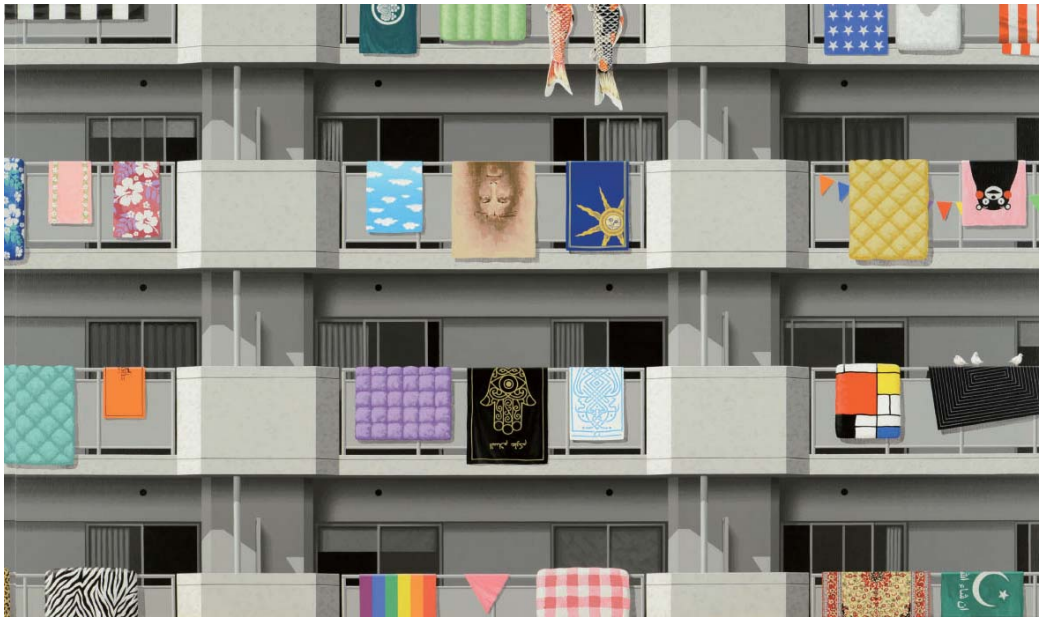


1 One day





2 集合住宅 A





3 薫風